

みやこ の 近代

108

高木 博志

大槻文彦の『言海』(一八九八年)には「旧都」の語はあるが、「古都」はみあたらない。国立国会図書館所蔵の本のタイトルをながめると戦前の例もあるが、戦後になって一般的に「古都」が使われるようになる。

とりわけ奈良や京都の人々が、自己の表象として「古都」と表現するのは、新しい出来事のようにだ。

さて今日、奈良や京都も古都と呼び慣わされるが、その歩みには違いがある。慶応三年の王政復古の大王令で、「神武創

エピローグ ②

業」が明治維新の理念となり、記紀神話にもとづく皇室の系譜を採用する。

しかし江戸時代の皇室仏教の系譜は、桓武天皇から江戸時代の天皇までと平安京のなかで完結していた。禁裏御料を媒介にした年中行事や日常の営みも、基本的には京都周辺とのつながりでおこなわれた。いわばこの世もあの世も、江戸時代の皇室は京都盆地で完結していた。明治維新以降に鄙の奈良が、皇室の故地として登場する。

奈良において一八八〇

積み重ねられた古都イメージ



京都御苑は1878年の榎村正直知事時代から整備が始まり、1883年の宮内省支庁の設置をもって今日の姿になる

年代には、荒廃していた大和三山が万葉の景観に蘇り皇室財産に編入され、正倉院や天皇陵が整備され、正倉院や天皇陵が整備されてゆく。一八九〇

年代には、帝国奈良博物館が開館し、奈良の仏像は信仰の対象から美術品へ、すなわち彫刻として読み替えられてゆく。岡倉天心の『日本美術史』により、奈良は推古天皇・天平といった古代文化に特化してゆく。また大正期の教養主義、ツリスムとともに「古寺巡礼」がブームとなり、敗戦以後は「神武創業」の表象はなくなるが、「美(うま)し国」としての奈良イメージは連続してゆく。一方、江戸時代、京都においては朝廷が文化的・宗教的価値の源泉であった。十八世紀以降盛んになる京都観光の目玉は、参内する異形の公家たちを、公卿門で人々が鑑賞することになった。一八六九年の東京「奠都」以降、天皇がいなくなった京都は、地域開発として、歴史・「伝統」や文化を打ち出してゆくこととなる。一八八三年の岩倉具視の建議は、モスクワの「旧都」にならない、京都御苑の整備を核として、大嘗祭などの宮中儀礼や畿内の古社寺の復興をはかろうとした。一八九五年の第四回内閣博覧会や遷都千百年祭で、平安神宮や時代祭が新しく創始される。優美な国風文化と京都イメージを重ねてゆく。一九一〇年代以降になると、まさに日韓併合を受けて、豊国廟や耳塚などの豊臣秀吉関係史跡が「海外発展」の先達として整備され、聚楽第や御土居が『京都府史蹟勝地調査会報告』に顕彰される。この頃、西の京ではキリシタン墓碑が、茨木山奥、千提寺ではザビエル像が発見され、新村出や浜田青陵はブームのなかで南蛮文化研究を進める。

国民国家の形成期には、国際社会に対して、奈良はギリシヤに匹敵する古代文化を、京都は中国から切れた独自の国風文化を押し出す。そして帝国の時代になると、「海外雄飛」のなか、奈良は日本の故郷となり、織豊期の安土桃山文化が京都イメージとなってゆく。このように戦前に積み重なったイメージを前提として、戦後には文化に特化した「古都」イメージが一般化するのだから、(京都大学助教授・日本近代文化史)